

〈研究・調査報告〉

## 「姨捨」から問われているものは何か ——福祉のまちづくりに関わる物語を読む

姜 東 星

### 【要旨】

本稿は、昔話・伝説・物語の事例研究として、「姨捨」に焦点を当てて読み解いた。問題意識である文学と絡めた福祉のまちづくりに関する試みを示した上で、まずは「姨捨」の昔話・伝説・物語の事例を通して福祉のまちづくりにつながる切口から考察した。次に作家井上靖の短編小説『<sup>おぼすて</sup>姨捨』(1955)という作品の「姨捨伝説」の隠喩の考察と親子・人間愛、山姥の考究を交え、併せて作家深沢七郎の原作『<sup>ならやまぶしこう</sup>檜山節考』(1956)との結び付きを辿り、福祉のまちづくりに寄与する物語の現代的解釈を解明することを試みている。

キーワード：姨捨、伝説、物語、生きている伝承、福祉社会

### 1. はじめに

福祉のまちづくりは、住民の生活の営みが支えであり、「地域の生活環境の価値との連関で据えられる<sup>1</sup>」生活文化そのものであると考えている。生活文化は、人が生きていく中で形成されてきた。その中には人の価値観が反映されている場合もあり、生き様は継承されていくこともあった。いま生きている人たちが生きる中で、その生活文化とつながっている。生活文化はどう継承されているのか、どう吸収されているのか。「経済的効果のみならず社会的効果、とりわけ福祉的、文化的効果<sup>2</sup>」と深く連関性を有している。安全安心なまちづくりは、住民にとっては心豊かに生きていくための基本理念であり、生活文化の振興として捉えられる。広い意味で福祉のまちづくりの要素がある。また、観光地における生活文化の掘り起こしと活用が重要視され、実際のまちづくりの取り組みの中で地域に受け継がれた物語性が新たに創出されている。

しかし、コロナ禍からの地域コミュニティの復活はどのようなものであるのか、再生課題の着眼点はどのようなものなのかという問いは本研究の思考の起点となる。コロナ禍の感染拡大の中で一時期医療機関の受け入れや医療的フォローアップを受けられないまま自宅待機をさせられて死去した高齢患者の例が出ている。「姥捨」「棄老」と医療現場のトリアージ問題が連動性を持っている。コロナ禍後のコミュニティのあり方は、コロナ禍前への復旧ではなく新たな

次元でのコミュニティ創造であり、そのためには生活文化に深く根ざす歴史的、文化的経験を軸の一つとして拠り所としたコミュニティの再生を示唆されている。

したがって、福祉のまちづくりは日本文化、生活文化に深く根ざしていること、地域社会の根っこからの歴史的・文化的経験を生かすこと、そして地域の誇りうるより豊かな文化の本質的部分を読み解き、今日的意義を解釈することが大事であることと考えられる。

そこで、本稿では、このような問題意識を出発点として、『姨捨』から問われているものは何か―福祉のまちづくりに関わる物語を読む』事例研究を通して、文学的要素を視軸とするまちづくりの視点から、福祉との関係を築くうえで文学には、場（風土）の「歴史に息づく精神性<sup>3</sup>」を掘り起こす特性があるからこそ、福祉のまちづくりに文化継承の精神的な意味を浮かび上がらせることにもなる。

以下では、まず始めに長野県千曲市「姨捨」を介した福祉のまちづくりの創出について取り上げ検討する。次に、作家井上靖の短編小説『姨捨』（1955）は、どのような思考につながっているのか、という作品分析の観点から考察する。さらに、深沢七郎の原作『ならやまがしこう檀山節考<sup>4</sup>』（1956）との結び付きを辿り考察したい。

日本臨床心理学者である河合隼雄（2017：41）の『昔話と現代<sup>5</sup>』という著書には、以下のような指摘がある。

昔話というものは、その中に現代人にとっての課題、そして時にはその解決への示唆をさえ内包しているものである。民衆の心から心へと伝えられてきたその内容は、人間の心の深みに通じるものがあり、時代を超える意味をもっている。

上記の著書の2章のサブタイトル「昔話に見る現代人の課題」（1989）には、昔話から「現代人の悩みや問題の解決」に多くの示唆に富んだ指摘と論考がある。

なお、「姨捨」は現代社会における「棄老」についての一つの隠喩的なものである。隠喩（メタファー）に対して文化人類学者である山口昌男（1990：145）は、著書『語りの宇宙』で次のように述べている。「現在メタファーに対する関心が起り得るのは、メタファーを介して、世界のこれまで見えなかった部分が見えてくるかもしれないという期待がある、ということ<sup>6</sup>」の考えの焦点に近づいてみたい。メタファーによって、文学の世界は、「目にみえないもの”をつかまえている<sup>7</sup>」と同時に、さらに「物語の尊さ<sup>8</sup>」による人々の考え方を変える力が包摂されていると考えられるからである。

## 2. 「姨捨」を介した福祉のまちづくりの創出

### 2.1 文化的資源の「姨捨」

以下では、先行研究から「姨捨」の地域資源を概観し、特に信州の文化資源「姨捨伝説」に

みる棄老から敬老・尊老への転換、そこにみられる本質を親子や人間愛と捉え、福祉のまちづくりを進める長野県千曲市の「灰の縄」の取り組みを紹介する。

千曲川左岸に高くそびえる冠着山かんむりぎやま（古くは姨捨山と呼ばれた）の麓は、日本棚田百選に認定されている「姨捨の棚田」を有し、平安時代から観月の名所として親しまれ、昔から旅人を魅了し続けてきた場所である。



写真1 善行寺平の眺望

（筆者撮影 2022年7月23日）

信濃の姨捨山は『古今和歌集』（905年）に初めて「姨捨山の月」と歌に詠まれ、また『大和物語』（956年）にみられる棄老説話等<sup>9</sup>が後世に伝わり、説話・文学である「棄老物語<sup>10</sup>」の地としても語り伝えられてきた。

『古今和歌集』卷第十七雑歌上に採られたよみ人しらずの八七八番歌、

わが心 なぐさめかねつ 更科や をばすて山に てる月を見て<sup>11</sup>

と歌われている。

「姨捨の棚田」近くの長楽寺（天台宗）は、古くから月の名所として多くの歌人が訪れた。松尾芭蕉（1644-1694）の「更科紀行」にも、「佛は姨ひとりなく月の友<sup>12</sup>」と詠まれている。長楽寺の境内には「姨石<sup>13</sup>」とよばれる巨岩がそそり立ち、その下に「芭蕉翁面影塚」や江戸の俳人加舎白雄<sup>14</sup>らの句碑・歌碑がある。長楽寺を中心とする「姨捨十三景<sup>15</sup>」もある。また、春には田んぼの一枚一枚に映る月が見られる美しい棚田の文化的景観は、「姨捨・田毎の月」（国名勝）で知られ、「今に生きる『月見の地』<sup>16</sup>」である。



写真2 「姨捨の棚田」景観 (筆者撮影 2022年7月23日)

また、月見にまつわる和歌や浮世絵が残され、月岡芳年作浮世絵「月百姿一姥捨月」や歌川広重が描いた「信濃更科田毎月鏡台山」(『六十余州名所図会』所収)の名も広がった。令和2年「月の都 千曲一姨捨の棚田がつくる摩訶不思議な月景色『田毎の月』—<sup>17</sup>」の「姨捨」を語る有形・無形の文化財群(29の文化財)を日本遺産として認定された。一方「棚田での耕作や伝統行事を通じて古老の知恵と地域の絆を大切にする教えを育んできた<sup>18</sup>」生きる営みは続いていくのである。



写真3 長楽寺境内にある「姨石」と文学碑 (筆者撮影 2022年7月23日)

また、JR篠ノ井線<sup>おぼすてえき</sup>姨捨駅は日本三大車窓の一つに数えられ、標高547mの山腰に位置している。「細長い善行寺平を北東に縦断する展望がきく。駅に降り立ち付近をながめると、山すそに丹念にこしらえられたいくえにも重なった<sup>たなだ</sup>棚田を目にする<sup>19</sup>」その雄大な眺めに癒される。1900年に開通された篠ノ井線・姨捨駅は急勾配のため、スイッチバック方式の停車駅<sup>20</sup>となっている。「おぼすてくつろぎの駅」としての存在だ。ここでは、写真愛好家や鉄道ファン等の多くの人が訪れる魅力的なスポットである姨捨駅の独特の文化的意味を味わうことだけではなく、「姨捨伝説」の思いに馳せる旅の意味を考えるきっかけにもなる場所である。



写真4 JR篠ノ井線 姨捨駅

(筆者撮影 2022年7月23日)

日本三大車窓<sup>21</sup>は、北海道のJR根室本線・狩勝峠越え(明治40年〔1907〕開通、昭和41年廃線、「狩勝ぼっぼの道」に転用)。JR篠ノ井線・姨捨駅(明治33年〔1900〕開通、長野県千曲市)。そしてJR肥薩線矢岳越え(明治42年〔1909〕開通、宮崎県えびの市)である。旧線狩勝峠車窓は、十勝平野を一望。日高山脈、阿寒の山並みを眺望できる。篠ノ井線・姨捨駅周辺の美しい夜景は、「日本夜景遺産」(2012 自然夜景遺産、2015 施設型夜景遺産)にも認定されている。JR肥薩線矢岳越えからの霧島連山とえびの高原の絶景を望むことができる。



写真5 姨捨駅

(筆者撮影 2022年7月23日)

## 2.2 「姨捨伝説」—文学における民族文化的体験

ところで、「日本文学における『姨捨』の系譜」について、工藤茂『姨捨の系譜』に関する重要な先行研究がある。工藤（2005：9）は次のように指摘している。

日本文学の中に「姨捨」「姥捨」「親棄」というモチーフを内包する棄老説話の流れがある。それは、奈良時代から江戸時代に至る、説話、和歌、歌論、物語、随筆、日記、謡曲、紀行、俳諧などに多様な面影を留めている。同時にこれらの話は、口承文芸の世界にも色濃く残っていて、青森県から沖縄県に至る各地において語られていた昔話や伝説にもその姿を見せていた。

「姨捨伝説」は文学の中に読み換えられ、日本各地で語り継がれてきたのである。姨捨山にまつわる伝説は、『大和物語』によれば、「一人の男と、その男を親代わりに養い育てた姨（をば）と、男の嫁との葛藤が原因で、男が年老いた姨を〈たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬ〉所に捨てる。ところが、男は〈としごろおやの如養ひ〉育ててくれた姨が心配で夜も眠れない。折から出た月に明るく照らされている山をながめ、わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみてと歌をよみ、翌朝姨を迎えに行った<sup>22</sup>」という。親を捨てる説話の「姨捨山伝説<sup>23</sup>」には、昔、貧しさゆえの口減らしとして、年老いた者は「山に捨てる」慣習があった。

この「子が親を捨てる話で、一つの型は年取った親を山に捨てるが、親が子の帰路を案じ木の枝を折って道しるべにしたことに感じ姥捨をやめる話。もう一つの型は棄老国きろうこく説話で、棄老の掟おきてがある国に隣国から難題を出されたとき、隠し養っていた親がこれを解決、以来敬老の国となる<sup>24</sup>」という説話である。

姥捨山説話の主題に共通するものは、棄老を批判する物語である。物語はどこであろうと、現代であろうと、人間の問題なのであり、福祉の問題との関わりで考えられる。物語に老人の知恵による難題が解かれ、掟を破り、蓄積している知恵が最大の宝物であり、知恵の力を象徴しているその主題である「親の愛」、「子の愛」と老人の知恵のありがたさは、老人を敬うことが文化として継承されてきたというのである。その共感の「愛」ということは、因習を超えて法令や老人を捨てる制度の廃止する糸口になることを意識したのである。

したがって、「姥捨」はインパクトのある地名である特徴を持っている。現地の新たな拠点都市として、千曲市が目指しているまちづくりは、「人が中心となり」、「『人がつながる』協働による活力あるまち<sup>25</sup>」としてすでに取り組みが始まっている。「人をてらす 人をはぐくむ 人がつながる 月の都～文化伝承創造都市・千曲～<sup>26</sup>」というまちづくりの人とのつながりが強く出ている。語り伝えられてきた「姥捨」伝説はいかにまちづくりに影響を及ぼしてきたのかがわかる。「姥捨」の読み換えることを通じて敬老・尊老の深い理解に結び付けることが可能となった。つまり、その根底には「愛」の感情を感じ取ることができる。原点は「愛」だと思われる。要するに、「姥捨十三景」という心の動く美しい風景の中に「愛」に対する理解を喚起されるのである。

「姥捨」についてどう学ぶのか、現地の小学生の創造活動に活かす事例がある。2006年、千曲市立更埴西中学校の一年一組の学生たちが製作した「灰の縄」が姥捨駅に展示されている。「私達は、郷土に伝わる姥捨伝説から、愛と勇気と知恵、平和の大切さを学ぶことが出来ました。捨てられゆく我が身にあっても、子が道に迷わぬよう、道標（みちしるべ）の為の枝を折ってゆく親の姿、悪しき掟を改めさせ、戦をも防いだというお年寄りの知恵。親、お年寄りを大切にという気持ちを形に表したいと願い、物語にある『灰の縄』を自分達で作ってみました<sup>27</sup>」と記されている。ここで、「姥捨」から得たものは、愛の感情も引き起こすだけではなく、福祉について考える契機になるのである。文学資源の活用も生き生きとした観光まちづくりになるものである。そこで現代の福祉のまちづくりの汎用性のある内容となっていることが読み取ることができる。

### 3. 井上靖文学の中の「姥捨」

#### 3.1 物語の連想、愛への伝承

ここまでは千曲市の文化的資源の「姥捨」について述べてきた。千曲市の例は、「姥捨伝説」を人間存在の意義、老人の知恵や役割など敬老・尊老と結び付け、福祉のまちづくりへの取り

組みを示していた。以下に、精神の核を探る井上靖文学の中の「姨捨」を考察する。

井上靖の短編「姨捨」は、『文芸春秋』第33巻第1号（昭和30年1月1日）に初発表され、その後新潮社刊短編集『姨捨』（昭和31年6月15日）に収録された。ここから『姨捨』には井上靖の「愛の超越的」なことに対する考え、そして小説には老人に対して問いかけの形をとっている物語の構造から、井上靖文学の世界を辿る一つの旅路が窺える。この旅道を通して井上文学の世界が精神的な追求を強調していることがわかる。

小説の主人公を指す一人称の「私」が、幼時に聞いた姨捨山の伝説は、「私の小さい心を悲しみでふくらませたようである。（中略）母を背負って、その母を山へ棄てに行くという事柄の悲しみだけが抽象化され、岩の間から滴り落ちる水滴のように、それが私の心に沁み入って来たのであり、また、「絵本『おばすて山』が少年の私の心にかに強烈な印象をもって捺印されたかが窺える」（井上靖「姨捨」新潮社より、以下同）とある。さらに、「幼時聞いた物語の中で現在に到るもなお忘れないでいるものは、高野山に父を訪ねて行った石童丸の物語とこの姨捨山の物語である。共に親と子の愛別離苦をその主題としている」という。「愛別離苦」を主題とした物語が少年時代の靖の内部に定着している。

井上靖は幼少期に家族と離れ、血縁関係のない祖母の手によって育てられた。「後年、彼はその当時を振り返り、そこで育まれた『愛』が特殊な愛であったことを述懐する。（中略）戦後彼は、『猟銃』、『闘牛』、『通夜の客』、『黯い潮』などにおいて、愛の諸相を追求していく<sup>28</sup>」のである。その「幼少年時代の祖母との共同生活を通して形成されたもの<sup>29</sup>」は、「人間の愛情を見ると、それをもっと別のものに置き替えたい激しい衝動を感じることがある<sup>30</sup>」ことこそ、井上文学の「尊厳を感得<sup>31</sup>」することにつながっていると見えよう。

この小説の始めは、絵本『おばすて山』における親子の深い情愛と老親の知恵によって難題を見事に解いてみせる。小説の中で、絵本『おばすて山』の説話については、以下のように述べている。

昔信濃の国に老人嫌いな国主があつて、国中に布告して、老人が七十歳になると尽くこれを山に棄てさせた。ある月明の夜、一人の百姓の若者が母を背負って山に登って行った。母が七十歳になつたので棄てなければならなかつたのである。しかし、若者はどうしても母親を棄てるに忍びず、再び家に連れ戻り、人眼に付かないように床下に穴を掘って、そこに匿まつた。この頃国主の許に隣国から使者が来て難題を持ちかけた。三つの問題を示し、これを解かなければ国を攻め亡ぼすというのである。その三つの問題というのは、灰で縄を縋うこと、九曲の玉に糸を通すこと、自然に太鼓を鳴らすことというのである。国主は困つて国中に触れを出してこの難題を解く智慧者を求めた。若者は床下に匿まっている母親にそれを話すと、母親は即座にそれを解く方法を教えてくれた。若者はすぐ国主のもとに申し出て、ために国の難を救うことができた。国主は若者の口から、それが老母の智慧であることを知り、老人の尊ぶべきを悟つてさっそく棄老

おきて  
の掟を廃するに到ったという」のである。(井上靖「姨捨」新潮社より)。

物語の背景にある絵本『おばすて山』の伝説に老人を山に棄てる棄老の因習を廃止させられたことの意味は大きい。「私」は「同じ更科さらしなの舞台で、同じ観月の歌を、著名な歌人や俳人たちがいかに取り扱っているかということに興味を持ったのである。(中略)母を姨捨山に棄てて家へ帰って来た若者が、母の居る姨捨山の山の端はにかかる月を見て詠んだという『我ころなぐさめかねつさらしなや姨捨山にてる月を見て』という歌であった。これは(中略)単なる観月の歌ではなく、その背後に一つの劇が仕組まれてあるものであった<sup>32)</sup>とある。次節では「その背後」にあることを井上の「姨捨」の読解から考察する。井上靖の『姨捨』では、食料の限界性など共同体持続の掟から老人が棄てられる「棄老伝説」の問題は、直接表には出てこない。この作品は、「姨捨伝説」に共振した井上靖自身の老いや死を考える中での現在における「姨捨」の想像的体験の物語である。

### 3.2 愛は出発点であり、愛は習俗を超えて

この作品では、姨捨の棄老伝説が「私」の頭に蘇ってきたのは「母」であった。「生来の自尊心の強さと負けん気」からの、自らが棄てられたいと言った「母」のことと絵本に描かれてあった「棄老説話の持つ主題とはかなり遠く隔たっていた」のである。「私」の場合は、「棄てておくれ、棄てておくれと言っている」「母自らが棄てられることを望んでいるからである。(中略)私は自分が棄てられたいとせがんでいる母を想像したことが厭むしであった。寧ろ自分が母を棄てようとしている場面を想像する方が、まだしも気はらくであるかも知れなかった」ということだ。

小説「姨捨」は老いたる「母親を棄てるに忍びず」という心理的に母への愛の結び付きのもと、「母」が「姨捨へ棄てられたい」という一種の矛盾を構成している。「姨捨山伝説」には、愛は慣習を超えて慣習を変えてしまう思いが伝わってくる一方、愛は複雑で重層的なものをこの作品は浮き彫りにさせる。それでも超越がある。「ある時私は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いている情景を眼に浮べた」と、「早く棄てておくれ」という子を「不義」に陥らせることになる。この「愛の重荷」という複雑な感情は、「私」自身への非難をどう克服していくのかという問いに導かれる。

下記は「私」と妹の清子の間の会話である。清子は「戦時中結婚して二児を儲けたが、事情があって、夫と子供を置いて婚家を飛び出し、一時実家である私の両親の許に帰っていたが、こんどは、自活するということを理由にそこを飛び出して」一人で炭鉱町に生活している。妹は、

「姨捨と言え、わたし、母さんはあの時、本当に姨捨山に棄てられたいと思ったのではなかったかと思うわ」と言った。

「どうして？」

「なぜか、そんな気がしますの。本当に一人きりだけになって、一切の煩わしいことから離れ、心から、どこかの山の奥へ棄てられたかったのではないかしら」

(中略)「わたしだって、家を飛び出す時は、そんな気だったんです。何というか、こう、急に一切の煩わしさから離れて一人になりたくなっちゃって——」

「姨捨へ捨てられたかったのか」

「まあね」

「棄てられたい」「母」の思いを肯定する子どもたちの様子が伺える。ここで、「妹は姨捨山に棄てられたいと言った母の気持ちに彼女らしい見方をしていたが、考えてみると、彼女こそ九州の炭田地帯の一角で、人工の不自然さを持った石炭殻の姨捨山の上に出る月を、二カ年近くも眺めて過しているわけであった」。弟の承二は、小説では一流新聞の政治部に勤めていた新聞記者で、終戦三年目のことで急に新聞社が厭になって新聞社を退いて、妻の実家のある地方の都市に帰って小さい銀行に勤めたのであった。「姨捨」ではもう一人「母」の弟、叔父のことを描いている。「土木会社の社長という一応成功者としての地位を築いたにも拘らず、終戦直後彼はこれと言った理由なく、自分からそこを退いていた。(中略)それは彼が自分を取り巻く環境に嫌悪の情を覚えたとしか考えられなかった」。「母」や妹の清子、弟の承二、叔父、そして「私」自身が、「人間嫌いの血は私の家の総ての者の体の中を流れているものではなかろうか」という「問い」を投げかけることは、「一種の厭世観」に対する疑問を強く表していることを考えさせられる。「戦後の何かと物の足らぬ時でもあり、家族制度への一般の考え方もヒステリックな変り方を見せている時」、「気のすむように一人で気随気儘に住まわせておくれ」という「母」が「挑戦する気になったもの」に、「無意識のうちに、ある共感を感じていた」「私なりの理解の仕方をしていた」からである。この井上が提起した根本的な問題には、厭世観と拮抗している生き方を同時に暗示していることが読み取れる。

さらに、自由への強い憧れ、自由のために、「棄てられたい」という極端の方式によって煩わしい人生を離れる「母」の考え方は、「姨捨」への新たな洞察と別解釈の可能性を提供している。『姨捨』は「棄てられたい母」と「母を背負い棄ててに行く私」が空想の中で交差する親子の愛の心模様や老い、死、自己嫌悪の問題を描いている。ここで「棄てておくれと望む母」には、「老いとともに一人の人間としての自由への希求」がある。「姨捨」という表現は、テキストに隠された部分を強調している。「姨捨」にメタファーされているものが「愛の表現」だけではなく、人生を自由に追求することの意味も含まれている。この精神に内包するもの、象徴的なものが潜在的に存在、共有する記憶を見だし、より共感を抱くことができる。

ここで、想起するのは、『山姥たちの物語——女性の原型と語りなおし』を解説する」中で、水田宗子(2002:16)が指摘しているように、「女性作家による物語の発見や、伝承文学、口承文学の見直し<sup>33)</sup>」という山姥の研究は、「山姥という原型に対しての読み直し、解釈のし

直しである。(中略) その中に語り直しという営為があつて、女性による魅力的な山姥像がつくりだされ、ジェンダー制度を揺るがすような可能性を示唆しているわけである<sup>34</sup>」という説だ。フェミニズム文学批評における山姥の原型の提起は非常に重要であり、「山というトポスが山姥のアイデンティティである。定着を拒み、移動し、自由に居場所を選択したいという存在。山姥は里の規範に照らしての解釈も、定義づけも不可能であり、自由奔放で、逞しく、自我と欲望の強い女である。里に依存しない、里に棲もうと望まず、さらに、里の男の手に負えない女である<sup>35</sup>」からだ。「山姥」の表現に託して語る物語で、自由に生きる「山姥的な生<sup>36</sup>」(高良留美子, 2002: 196) のことへの想像力の魅力を潜めていることが示された。そのうえ老年は、「既成の価値観や制度を逸脱できる自在な精神・思考を獲得できる時間ともいいかえることができ<sup>37</sup>」(尾形明子, 長谷川啓, 2008: II) るからである。

#### 4. 物語の伝承、深沢七郎「檜山節考」

深沢七郎「檜山節考」(1956)は『中央公論』に発表、第1回中央公論新人賞受賞作である。「姨捨伝説」を題材に当時の社会に大きな衝撃を与えた。「檜山節考」は「山深い貧しい部落の因習に従い、年老いた母を背板に乗せて真冬の檜山へ捨てていく物語<sup>38</sup>」である。「信州の山深い寒村。その村人は、70歳の冬には皆檜山へ参り死を迎えねばならない。それは結局自分達自身が生き延びていくための残酷な掟であった<sup>39</sup>」。「中央公論新人賞選後評」(『中央公論』1956年11月号)では、中央公論新人賞の選考委員であった武田泰淳は、「いかなる残忍なこと、不幸なこと、悲惨なことでも、かえってそれがひどくなればなるほど、主人公の無抵抗の抵抗のような美しさがしみわたってくる<sup>40</sup>」と選評し、伊藤整も、「僕ら日本人が何千年もの間続けてきた生き方がこの中にはある。ぼくらの血がこれを読んで騒ぐのは当然だという感じですね<sup>41</sup>」と選評している。

「檜山節考」は語り継がれてきた「姨捨伝説」を超えて、ただ親孝行の訓話としてではなく、また、自ら進んで「檜山まいり」に行こうとする母と息子との間の情愛の表現だけでなく、「親を捨てるか、子を捨てられるか<sup>42</sup>」への鋭い問いかけは、「人間の矜持と生と死の尊厳を極限まで問う<sup>43</sup>」のである。

作品の冒頭には、「山と山が連っていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村——向う村のはずれにおりんの家はあった。家の前に大きい檜けやきの根の切株があつて、切口が板のように平たいので子供達や通る人達が腰をかけては重宝がっていた。だから村の人はおりんの家のことを『根っこ』と呼んでいた。嫁に来たのは五十年も前のことだった。この村ではおりんの実家の村を向う村と呼んでいた。村には名がないので両方で向う村と呼びあっていたのである。向う村と云っても山一つ越えた所だった。おりんは今年六十九だが亭主は二十年も前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行った時、谷底へ転げ落ちて死んでしまった。後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になった辰平の後妻を探すことの方が

頭が痛いことだった。村にも向う村にも恰好の後家などなかったからである」（深沢七郎「檜山節考」筑摩書房より、以下同）と書かれている。

村では七十になれば「檜山まいり」に行く習わしがある。おりんは、「村一番の良い器量の女だと云われ、（中略）檜山まいりに行くときは辰平のしょう背板に乗って、歯も抜けたきれいな年寄りになって行きたかった。それで、こっそりと歯の欠けるように火打石で叩いてこわそうとしていたのである」。この村では食料を盗むことは極悪人であった。「最も重い制裁である『檜山さんに謝る』ということをされる」からである。読みての心に刻まれている小説の描写は、食料が極度に不足している中での残酷な生の現実が隠されてはいなかった。

続いて物語を追跡してみよう。おりんの山の行く日に辰平は背板に母を背負って家を出た。「秃げ山のような所があって岩ばかりである。そこには白骨が雪のふったように、あたりが白くなるほど転がっていて」「おりんは手を延して辰平の手を握った。そして辰平の身体を今来た方に向かせた。辰平は身体中が熱くなって湯の中に入っているようにあぶら汗でびっしょりだった。頭の上からは湯気が立っていた。おりんの手は辰平の手を堅く握りしめた。それから辰平の背をどーんと押した。」「おっかあ、雪が降ってきたよう」「おりんは静かに手を出して辰平の方に振った。それは帰れ帰れと云っているようである。」「おっかあ、寒いだろうなあ」「おりんは頭を何回も横に振った」とあり、心の痛みを伝えてくれる衝撃的な場面が浮かび上がる。「辰平の声のする方へ手を出して帰れ帰れと振った」おりんの子への愛しむ念があり、山に棄てに行かざるを得ない辰平は、「山から帰る時は必ずうしろをふり向かぬこと」という山の掟を破った母への深い愛、そこにこそ生命を尊び、「生の本質に迫った<sup>44</sup>」作品であることが考えられる。

70歳になって「檜山まいり」に向かう母おりん、母を背板にのせて山に捨てに行く息子、母を思う余り捨てる側に禁じられている「ふりかえり」の掟を破る辰平。そこには自給自足の閉鎖社会における限られた食料を分けて生きる共同体文化に浸った親子の愛、そのような限界性の中での母おりんの「檜山まいり」には共同体の価値観を体現する尊厳すら保持されているのである。

『深沢七郎集 第一巻』（1997・「檜山節考」収録）の解説に白石かずこが「世界の深沢文学」と題して次のように指摘している。「深沢七郎の文学は、日本の土壌でうまれたファンキーなものであるにもかかわらず、世界との共通項をもって、人間の普遍的な老いと死、家族、貧にふれていて、西欧のくにも同じリアリティがあるということだ。（中略）日本が世界に誇れる今世紀の作家というと、わたしは深沢七郎をまっ先にあげるであろう。わたしたちにはみえない足許の奈落をみていると同時に天上にそのころざしはわかっている。（中略）笑いというもの、深沢七郎はどこで手に入れたのだろうか。痛烈でひたむきな、欲望への愚かさへの笑い、ここまで描かねば気のすまぬ深沢七郎の深淵の怒りと哀しみが、闇の中に見える<sup>45</sup>」と、深沢文学の本質的なものを読み解いて明らかにしてくれたのである。

深沢七郎の「檜山節考」も「姨捨伝説」を題材とした作品であるが、「姨捨伝説」と真逆で

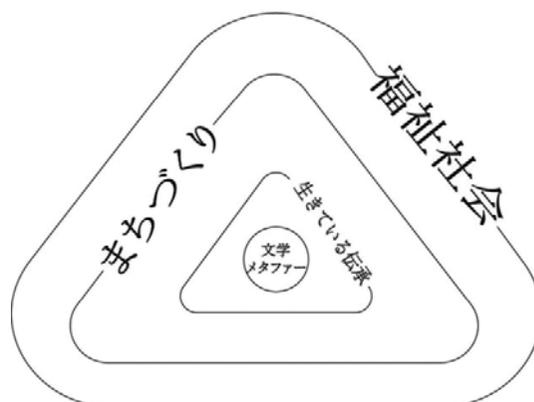
ある。捨てなければならない母親をどうしても捨てることが忍びなく山から連れ戻り、棄老の掟を廃止することに到達した「姨捨伝説」の内奥に隠されている真実が、つまり「檜山節考」によって棄老伝説に隠された残酷さが暴き出されている。

また、捨てると捨てられることを破壊し、「姨捨」の原型を破壊している「里から外部へはみ出していった<sup>46</sup>」山姥の原型の語りなおしに結び付いていくことが考えられる。柳田国男の昔話にある「共同生活の痕跡<sup>47</sup>」はそれらを連想させる。柳田国男『遠野物語』の第111章に登場する「デンドラ野」は「特定の場」である。昔は60歳を過ぎた老人は里から「デンドラ野」へ送られる習わしがあった。そこで送られた老人たちが共同生活をする。日中は里へ下りて農作業の手伝いで生活をしていた。「デンドラ野」については、「山姥」との比較によって関心深い課題を指摘できるが、また稿をあらためて論じることにはしたい。

## 5. むすび

本稿では、昔話・伝説・物語の事例研究を通して、「姨捨」に焦点を当てて読み解いた。「福祉のまちづくりに関わる物語を読む」ことを通じて、文学資源は地域づくりにどのように応用することができるのか、生活の価値観とのふれあいがどのように精神性を掘り起こしていくのかを文学的アプローチの視点から追求した。「姨捨」は新たな問題として、どのように読み換えることができるのか、文学と福祉の双方に関わる物語の現代的解釈がきわめて重要であると考えられる。

付け加えておけば、122年前に開通した姨捨駅は、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、大正デモクラシー時代の木造設計の駅舎がある。姨捨駅の開設と保存は文化や福祉制度、人間の感情など多くの面が含まれている。姨捨駅の存在はまさに生きている文化であり、継続的に呼応し福祉に関わる伝承の場とも言える。阿比留勝利（2022）は、「文学を介した地域との人的、文化的刺激の授受が風土の精神を呼び覚ますとともに新たな縁や交流を創出する<sup>48</sup>」ことを示唆している。「文学・メタファー」、「生きている伝承」、「まちづくり」、「福祉社会」



につながっている考察が文学資源を地域づくりに応用する試みを提供している。個性豊かな福祉のまちづくりの実行として理解することには、今なお「生きている伝承」に着目することがきわめて有効であることを再認識した。

「姨捨伝説」はすでに千曲市の福祉のまちづくりに体现されている。「姨捨伝説」と社会福祉は民族の文化的体験に根ざしている。この心に留まる愛の伝承は、福祉の制度の確立と高齢者の福祉・医療支援サービスの主旨とも関係がある。「姨捨伝説」は非常に豊かな文化的含蓄に富んでいる。また、文学は一つの参照軸として、伝統文化の解釈と活用に社会をよりよくする働きがある。「姨捨」から何を学ぶべきか、文学資源がどのように精神の核心にまで深く入り込むのか、さらに探求する必要がある。日本各地に息づいている「姨捨」や「山姥」伝説は多々ある。本稿をきっかけとして、今後もさらに姨捨の研究、山姥の研究に邁進し、まちづくりや福祉社会との関連を進めていきたい。

## 【注】

- <sup>1</sup> 社団法人日本観光協会編（1985）『観光地づくりの道標Ⅱ－地域ぐるみの活性化方策』p.26. 丸井工文社.
- <sup>2</sup> 同上. p.20.
- <sup>3</sup> 同上. p.42.
- <sup>4</sup> 深沢七郎の短編小説。1956年雑誌『中央公論』11月号に掲載され、第1回中央公論新人賞を受賞した。木下恵介（1958）と今村昌平（1983）の映画化した『檜山節考』。  
『檜山節考』（松竹・1958年の映画）、監督・脚本：木下恵介。出演：田中絹代、高橋貞二、宮口精二、市川團子ほか。『檜山節考』（今村プロダクション、東映・1983年の映画）、監督・脚本：今村昌平。出演：緒形拳、坂本スミ子、あき竹城、左とん平、小林稔侍、倍賞美津子、樋浦勉、江藤漢ほか。カンヌ国際映画祭にてパルム・ドール（最高賞）を受賞。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A5%A2%E5%B1%E7%AF%80%E8%80%83>  
(参照 2022-9-17)
- <sup>5</sup> 河合隼雄著，河合俊雄編（2017）『昔話と現代〈物語と日本人の心〉コレクションV』p.41. 岩波書店.
- <sup>6</sup> 山口昌男（1983）『語りの宇宙』p.145. 冬樹社.
- <sup>7</sup> 水木しげる（1992）『妖怪画談』p.220. 岩波書店.
- <sup>8</sup> 小川洋子（2007）『物語の役割』p.36. 筑摩書房.
- <sup>9</sup> 千曲市文化財センター（2013）『姨捨の棚田ガイドブック』p.9. ほおずき書籍株式会社.
- <sup>10</sup> 文学史上に平安時代仏教説話集『日本霊異記』や回想録『更級日記』、『今昔物語集』、謡曲『姨捨』『蟻通』など語り伝えられている。
- <sup>11</sup> 工藤茂（2005）『姨捨の系譜』p.44. (株)おうふう.

- <sup>12</sup> 中村俊定校注（1971）『芭蕉紀行文集』文庫本. p.120. 岩波書店.
- <sup>13</sup> 姨石周囲にある「姪石」「甥石」「小袋石」と呼ばれている岩塊は、いずれも「姨捨十三景」に数えられている。
- <sup>14</sup> 加舎白雄（1738～1791）は蕪村と並び称された江戸の俳人。句碑「姨捨や 月をむかしのかゞミなる」は長楽寺の文学碑群にある。「芭蕉翁面影塚」は加舎白雄らの建立。
- <sup>15</sup> 「冠着山・更科川・田毎の月・姨石・姪石・甥石・小袋石」など、13か所の風景や事物を描いた「放光院長楽寺十三景之図」（『善光寺道名所図会』所収）。千曲市文化財センター（2013）前掲書. p.9.
- <sup>16</sup> 冠着山 <https://tsukino-miyako.jp/history/bunkazai/bunkazai-17/>（参照 2022-9-17）
- <sup>17</sup> 文化庁編ガイドブック『日本遺産』p.60. 千曲市日本遺産センターは2021年に開館。令和2年6月19日に日本遺産として認定されたことから、「月の都」は千曲市のブランドイメージとして知られてきている。
- <sup>18</sup> 同上.
- <sup>19</sup> 長野県高等学校歴史研究会編（1994）新版『長野県の歴史散歩』p.74. 山川出版社.
- <sup>20</sup> 急勾配を緩和するために折り返し式で、後退と前進を伴い登る仕組み。
- <sup>21</sup> 日本三大車窓 <https://tabi-mag.jp/trainwindow/>（参照 2022-9-17）
- <sup>22</sup> 工藤茂（2005）『姨捨の系譜』前掲書. p.15.
- <sup>23</sup> 姨捨駅のパンフレットによる「故郷の民話『姨捨山伝説』」を次のように載せている。

昔、年寄りの大嫌いな殿様がいて、「六〇歳になった年寄りには山に捨てること」というおふれを出しました。殿様の命令には誰も逆らえません。親も子も、その日がきたら山に行くものとあきらめていました。

ある日のこと、一人の若い男が、年老いた母親を背負って山道を登っていきました。深い悲しみを振り払うようにただ夢中で、ふと気がつくと、背中の母親が「ポキッ、ポキッ」と木の枝を折っては道ばたに捨てています。男は不思議に思いましたが、何も聞かずそのまま歩き続けてゆきました。

年よりを捨てるのは深い深い山奥です。男が母親を残して一人帰るころには、もう日がとっぷりと暮れて、あたりは真っ暗闇。男はすぐさま道を見失って、母親のところへ引き返しました。母親は静かに言いました。「さっき、木の枝を折ってきた、それを辿ってお帰り。」子を思う親の深い愛情を、今更ながら知った男は、ついに殿様の命令にそむく覚悟を決め、母親を家に連れて帰りました。それからしばらくして、隣の国の殿様が、この国の殿様へ使いをよこしました。「灰で縄を縋（な）え、できなければお前の国を攻め滅ぼす。」家来の誰に聞いても解らない殿様は困りはてて、国中におふれを出しました。それを知った男はひそかに隠していた母親に聞くと「そんな事は造作もない。塩水で浸したわらで縄を縋って焼いてごらん」と教えました。男は教えられたとおり「灰の縄」をつくり、殿様に持ってゆきました。しかし、隣の殿様はまた難問を突き付けました。曲がりくねった細い穴の開いた玉に糸を通せというものです。今度も男は、「穴の一方に、はちみつをぬり、反対側の穴から糸をゆわえつけた蟻を入れなさい」と母親に教えられて、糸を通すことができました。次々に難問を解かれた隣の殿様は「こんな知恵のある者がいる国と戦っても勝てるわけ

がない」と、攻撃するのを諦めました。たいそう喜んだこの国の殿様は、男を城へよび、「褒美を取らず。何でもほしいものを言うがよい」と、言いました。「褒美は……」、男は決心して母親のことを話しました。「なるほど、年寄りと云うものはありがたいものだ。」殿様は、自分の考えが間違っていたことに気づき、すぐさま年寄りを捨てる事をやめる様おふれを出しました。それから、どこの家でも年寄りを大切に、仲良く暮らすようになりました。

<sup>24</sup> <https://kotobank.jp/word/%E5%A7%A5%E6%8D%A8%E5%B1%B1-819847> (参照 2022-9-17)

<sup>25</sup> <https://www.city.chikuma.lg.jp/material/files/group/10/keikaku1.pdf> (参照 2022-9-17)

<sup>26</sup> 同上。令和4年4月1日より、令和8(2026)年度を目標年度とした「第三次千曲市総合計画」により。「市民一人ひとりが輝くためには、その人らしい個性や価値観を認め合い、安心して自立した生活を送るための社会の形成が必要である」と示している。

<sup>27</sup> 千曲市立更埴西中学校1年1組の学生の「灰の縄製作」の看板説明により。

<sup>28</sup> 工藤茂(2005)『娼捨の系譜』前掲書。p.183.

<sup>29</sup> 井上靖(1993)『新潮日本文学アルバム48』p.15. 新潮社.

<sup>30</sup> 同上。p.61.

<sup>31</sup> J.Lボルヘス著、鼓直訳(2002)『ボルヘス、文学を語る』p.68. 岩波書店.

<sup>32</sup> 井上靖(1995)『井上靖全集 第四巻』p.499. 新潮社.

<sup>33</sup> 『RIM』(2002) アジア・太平洋女性学研究会会誌5(1):16.

<sup>34</sup> 同上。p.15.

<sup>35</sup> 同上。p.7.

<sup>36</sup> 水田宗子、北田幸恵編(2002)『山姥たちの物語—女性の原型と語りなおし』p.196. 學藝書林.

<sup>37</sup> 尾形明子、長谷川啓編(2008)『老いの愉楽—「老人文学」の魅力』p. II. 東京堂出版.

<sup>38</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A5%A2%E5%B1%B1%E7%AF%80%E8%80%83>  
(参照 2022-9-17)

<sup>39</sup> 今村昌平監督作品『楡山節考』(東映株式会社DVD表紙解説より)。

<sup>40</sup> 『中央公論』(1956)に第1回中央公論新人賞発表、受賞作深澤七郎「楡山節考」である。「新人賞選後評」(選考委員伊藤整、武田泰淳、三島由紀夫)、『中央公論』(1956、第11月号)p.202. 中央公論社.

<sup>41</sup> 同上.

<sup>42</sup> 今村昌平監督作品『楡山節考』(DVD表紙解説より)

<sup>43</sup> <https://www.shinchosha.co.jp/book/113601/> (参照 2022-9-17)

<sup>44</sup> 井上靖(1993)『新潮日本文学アルバム48』前掲書。p.81.

<sup>45</sup> 深沢七郎(1997)『深沢七郎集 全十巻』p.7-8. 筑摩書房.

<sup>46</sup> 『RIM』(2002)前掲書。p.14.

<sup>47</sup> 宮田登編(1992)『柳田国男対談集』p.293. 筑摩書房.

<sup>48</sup> 阿比留勝利(2022-6-3書簡)

## 【謝辞】

本研究調査の遂行と調査報告の作成にあたり、終始適切な助言と細部に渡るご指導を賜った、阿比留勝利先生、長谷川啓先生、張岩冰先生に深く感謝申し上げます。また、ここに研究・調査報告について有益なコメントをくださった中沢信一郎先生、瀧章次先生、堀千鶴子先生にも心より感謝申し上げます。

## 【参考文献】

- 河合隼雄（1979）『昔話の深層』福音館書店。  
井上靖（1995）『井上靖全集』新潮社。  
深沢七郎（1997）『深沢七郎集 全十巻』筑摩書房。  
社団法人日本観光協会編（1985）『観光地づくりの道標Ⅱ—地域ぐるみの活性化方策』丸井工文社。  
河合隼雄著，河合俊雄編（2017）『昔話と現代〈物語と日本人の心〉コレクションV』岩波書店。  
山口昌男（1983）『語りの宇宙』冬樹社。  
水木しげる（1992）『妖怪画談』岩波書店。  
小川洋子（2007）『物語の役割』筑摩書房。  
千曲市文化財センター（2013）『姨捨の棚田ガイドブック』書籍株式会社。  
工藤茂（2005）『姨捨の系譜』（株）おうふう。  
中村俊定校注（1971）『芭蕉紀行文集』文庫本。岩波書店。  
長野県高等学校歴史研究会編（1994）新版『長野県の歴史散歩』山川出版社。  
井上靖（1993）『新潮日本文学アルバム48』新潮社。  
J.L.ボルヘス著，鼓直訳（2002）『ボルヘス、文学を語る』岩波書店。  
『RIM』（2002）アジア・太平洋女性学研究会会誌 Vol.5-No.1。城西国際大学。  
水田宗子，北田幸恵編（2002）『山姥たちの物語—女性の原型と語りなおし』學藝書林。  
尾形明子，長谷川啓編（2008）『老いの愉楽—「老人文学」の魅力』東京堂出版。  
今村昌平監督・脚本（1983）『楡山節考』（DVD）東映株式会社。  
『中央公論』（1956年11月号）中央公論社。  
宮田登編（1992）『柳田国男対談集』筑摩書房。

# What Questions Are Raised from Obasute Legends? —Reading Stories on Welfare Communities

Jiang Dongxing

## Abstract

This paper focuses on “Obasute” conception by examining cases of reading old tales, legends, and stories. It also examines various issues related to literature and welfare, such as what questions are raised from Obasute Legends. Furthermore, it becomes especially clear that “paying attention to living traditions” is still extremely effective in implementing and understanding the development of unique welfare communities.

Keywords: obasute mountain legends, obasute rain station, stories, living traditions, welfare communities